

## 武田泰淳と「文藝通信」

A study of TAKEDA Taijun and the literary magazine Bungei-Tushin

長 田 真 紀

OSADA Maki

〔キーワード〕「武田泰淳」「中国文学」「文藝通信」「魏金枝」「白旗手」

このたび、竹内好の昭和十二年次の日記<sup>①</sup>を閲していったところ、次の記載が目にとまった。

一月十五日（金）

晴。五反田相馬屋にて原稿紙を購め、武田を訪う。金を借る。夕刻帰る。『文芸通信』二月号、吉村、武田、一戸、小田等、中国文学特輯あり。『芥川全集』漫読。未だ『自得堂』に着手せず。

あわせて、昭和十二年の「文藝通信」二月号（第五卷第二号・昭和十二年二月一日発行）を確認したところ、武田泰淳が「中國作家列傳」という一文と、魏金枝の長編小説「白旗手」についての「作品紹介」と翻訳した上での概要を発表していることが判明した。

これは、『増補 武田泰淳全集』に未収録であり、武田年譜の定

本ともいふべき古林尚氏作製の「武田泰淳年譜」〔『増補 武田泰淳全集』の別巻『増補 武田泰淳研究』（昭和五十年三月筑摩書房）に収録〕にもその存在についての記述はない。

本稿では、この「中國作家列傳」および魏金枝の小説「白旗手」の「作品紹介」と概要を紹介し、武田文学誌の空白を埋めたい。

まずは全文を掲げる。なお、仮名遣い、旧漢字の表記等は原文のままとした。句読点の不備についてもあくまで原文にしたがい、敢えてそのままとした。

### 中國作家列傳

武 田 泰 淳

「創造社」「文學研究會」の二大作家集團はいつのまにか消え

失せ、多くの優れた文學者が文學から遠ざかつた。創造社の幹部であつた人人の中、郭沫若は日本に来て金石文字の研究に入り、張資平は大衆小説にすすんで中國の菊池寛となり、成仿吾は實踐運動に入つて影を消した。わづかに十一月に來朝した郁達夫と今なほ小説、評論の筆をとる鄭伯奇との二人が作家として残されてゐるにすぎない。郁達夫は作家らしい作家であつた。彼は自己の苦惱、不安を誠實に物語つた。彼の弱々しい詩的な文章は中國には全く珍しいものであつた。現在彼はあまり書かなくなつた。しかし彼の作家としての位置は高く評價さるべきである。「寒灰」「雞肋」「過去」「奇零」「敝帚」等の創作集の題は彼の傾向をよく示すものであらう。彼の心の記録である「日記九種」はながく紀念されるところである。鄭伯奇は「文學界」「作家」等に小市民の生活を諷刺したものを書いてゐるが經歷の古い割にすぐれてゐない。彼にくらべれば恵まれぬ状態の下にあつて苦しんでゐる郭沫若の方が優秀である。郭氏は十月に「冢蹄」といふ歴史上の人物（孔子とか孟子とか）に取題した諷刺短篇集を出してゐる。此の種のもは小説とは言ひにくいかもしれないが文化上の役割はなか／＼大きい。

文學研究會の方では茅盾をはじめ活躍してゐる作家はなか／＼多い。彼等は現在兎も角、或る種の支配的な勢力を持つてゐる。茅盾は昔は沈雁冰と言つてゐたのであるが「春蠶」等の農村小説でまじめなりアリズムの路を開いてから文壇にしっかりとした地位をきづき、上は金融資本家から下は勞働者にいたる社會の各層を大がかりで書いた長篇「子夜」を發表するに

たつて精力的にも群小作家を壓倒した。彼の文章は砂を嚙むやうで詩的精神が缺乏してゐるのだが要するにねばり強くリアリズムに喰ひ下らうとする熱心な態度が青年をひきつけるのである。鄭振鐸は作家としてはつひに成功できずに終つたが「文學」を編輯したり、文學史上の勞作をやつたりして文壇的には勢力を振つたものだが、彼の抱いてゐる文學はすでに古いものとなつてゐる。

論争から論争へと喧嘩に人生の後半をつひやした魯迅は「作品の書けない作家」として死んだ。魯迅の此の文學者としての矛盾は中國現代作家の一つの矛盾を示すものと云はれる。彼の作家的個性はすさまじい政治性の嵐の中に吹き去られ、つひに版畫の紹介、ソヴィエツト作品の翻譯、ラテン化新文字運動の援助、文藝雜誌「作家」の發行、新進作家の指導、そして鋭い皮肉を持つた破片のやうな文章をつづる事によつて彼の文化人としての使命を終つたのである。

彼の弟の周作人は兄と同じ矛盾におちいらぬやうに巧に身を處した。彼は群小小説家を見下ろし眞の文學は隨筆にありと言ふ風に高く持してゐる。彼は自己の文學的才氣をたのんで小品文の一派をなしてゐる。彼の「新文學の源流」は文學評論の一つの方向を明示するものであつた。言語學者林語堂も小品文派として「論語」「宇宙風」等の小雜誌を發行してゐる。彼等は上海を中心とする小説黨に對立して北京を中心とする小品文黨を結成してゐるかの如くである。内容は違ふが日本にあてはめると上海黨は「人民文庫」派とすれば北京派は「日本ロマン派」

と言へるだらう。中國の「日本ロマン派」の勢力もあなどりかたきものがある。

ところで現在作品の数の多いのは張天翼である。日本の人は彼の多作にはたいがいビツクリする。多作な位だから實につまらぬ無神経な作家である。こんな作家が平氣で書いてゐるところ中國の文壇は一寸變つてゐる。筋の運びの早いのと一寸面白い人物の組み立てをしてごく低い諷刺の笑の調子があり農村物を澤山書いて人氣を呼んだ。彼には作家的苦惱とか文學者の精神といふものがてんで見出せない。彼の眞似をする若い作家もあるらしいのは困つた事だ。

自己の苦惱を作品ににじみ出してゐる作家としては「文季月刊」によつてゐる巴金、靳以等がある。巴金は知識階級の思想、感情に深く沈み込み「暗い心」の意義を知つてゐる中國には非常に珍しいタイプの一人である。フランスに留學しアナキズムに共鳴したりした特異な過去の影が彼にロマンティックな風格をそなへしめてゐる。長篇「滅亡」「海の夢」「雪」等の作品の他に多くの短篇がある。革命運動に従事する人人を描く時も何か悲しげな音調がその上にひびきわたつてゐる。今年發表した「雨」「髪の毛の話」等の短篇は皆實踐運動に走つた人人を見るにつけ自己の消極的な生活を暗くみつめずにはゐられない彼の反省を示すものである。今年書きはじめた長篇「春」にも虚無的な冷靜さで物を見る態度があらはれてゐる。

特異な作家としては他に老舍、沈從文をあげる事が出來やう。老舍は現在ではユーモア作家として有名で、小品文雜誌「論語」

によつてゐる。しかし以前にはすぐれた長篇作家であつたので彼のユーモア長篇「牛天賜傳」もへたなりリズム作品よりは人間心理の機微をとらへてゐると云へる。官廳の小役人の生活を描いた「庶務日記」の作者老向もさうであるが中國のユーモア作家はみなかなり深い思想的根底を持つてゐる。此の點日本のユーモア作家よりまさるとも劣らない腕前を示してゐる。小品文一派の勢力のおとろへぬのも彼等が自己のグループに優秀なユーモア作家を持つてゐることが一つの強味になつてゐるからである。沈從文の特異性はその牧歌的詩情にあると云はれてゐる。彼は農村の風景に美を見出す事の出来る自然人的素質を持つてゐる。此の野性的な美しさを引き出す力が彼の精神力の甘さを我々讀者にむき出しに見せない。農民小説には感情の涸渴したガサ／＼した描寫が多いのに彼のみは例外である。彼の作品は最近、良友文學叢書の「從文小說習作選」に集大成されてゐる。面白いことに彼は軍人出身である。

さて今年の成績等から推量して今後もつとも問題にされるだらうと思はれるのは蕭軍と歐陽山である。蕭軍の作品は全く現代ロシア文學と酷似してゐる。いまだでロシア以外の土地で此程ソヴィエツト風の作品が生れた事はおそらくあるまい。蕭軍は例へて見れば「中國のシヨロホフ」である。ただ片方は滿洲の山岳地帯の住民を一方は靜かなドン河の流れに沿ふコザック達を書いた點が異なるのみである。悠大な自然の描寫、土から生れた野生的な人民の生き生きとした素樸で熱情的な生活の記錄。こんな作品が生れ出る事を中國文壇の先輩達（特に魯迅）

は待ちに待つてゐたのである。蕭軍は彼の作品から推察するに満洲出身で憲兵になつた事があり入獄した事のある男である。彼より一二年早く有名になつた葉紫なども農民小説家として優秀ではあるのだが、彼の方が規模がはるかに大きく出来てゐる。

新進作家が眞に集結してゐるのは雑誌「作家」であるが彼も「作家」が育てあげた作家である。今年創刊號に短篇「同行者」と長篇「第三代」の一部・二部が發表されてゐる。「同行者」は不思議な同行者と満洲の荒野を旅行した記録にすぎないがすでに彼の呼吸の長い作家であることを示した。「第三代」は女殺しをして匪賊の仲間入をした楊三といふ男を中心として城廓のごとき家をもつ族長・愚かな狐うちの獵師・胡琴の名人の老農・火のやうな性格をもつ農婦等がつぎ／＼とあらはれてしかもよく構成された大衆小説である。未完で、どのくらゐの長さか未だわからない。

歐陽山は廣東市中の下層人民の生活を書いてゐる。人物の會話を見ても彼が此等のどん底の人人の奇妙にニヒリスティックでまた底力のある哲學に通じてゐることがわかる。人間と人間とのからみあひが南方の民衆の間ではまた異つた亂反射に似た現象を示す。奇怪な經驗に富む労働者・小市民との交際の廣い彼は知識人を信用しない。

女流作家の群は誰れもかれも振はなくなつてゐる。詩情をたたへられた冰心も、「水」「母親」の傑作を書いた丁玲もすでに衰へた。

戯曲作家では田漢、李健吾、洪深は中堅である。田漢は演劇

運動で男を賣り多くの作品を書いたが結局「暴風雨の中の七人の女性」を書いた頃が彼の絶頂であつたと見え最近では轉向したとか云はれ、洪深とともに映畫脚本に向つた様だ。洪深は農村三部作、殊に「五奎橋」であつたものだがそれきり後がつづかなかつた。此の點李健吾の方は今後有望である。「雷雨」の一作で一躍のり出した曹禺はギリシヤ演劇を研究した教師だけあつて構成は綿密で他に比を見ない。「雷雨」では父子相姦といふ事件が悲劇の運命的因子であつたが今年の「日の出」では生活環境が一女性を中心とする悲劇の運命的因子をなしてゐる。寡作で力作家のところたのもししい存在と云ふべきである。

## 白旗手

### ——(作品紹介)——

魏 金 枝 作

「魏金枝は新進と云ふには作家的經驗は長いのだが、我國では彼の價值は殆ど認められておらぬ。彼は愚直な農民を描く場合も、知識人としての自己を反省する場合も同じ様な深みのある態度と質實な筆致を以てする。短篇集「七つの手紙からなる自傳」・「奶媽」最近では「制服」それから此處に大略を紹介する長篇・白旗手をおさめた創作集「白旗手」等がある。私は彼の「白旗手」と蕭軍の「第三代」をリヤリズムの正道を示す二大作品と信づる。」

(譯者)

今はまつられた泥菩薩もくづれかかつてゐる古寺・白塔寺に、軍隊募集のため、勤務と老李とはもう長いこと住んでゐた。

太古さながらの田園風景の中に竹の葉の上に落ちた白鷺の糞のみが氣持の悪い臭氣を送つて来る。彼等はこのものうい風景の中で其の日其の日を送つてゐる。だが老李には樂しみがあつた。彼はうんと馬鹿供を募集して金を儲けるのだし、烏狗といふ村民の妻を自分のものにしてゐる。

だが勤務はどうか。彼には金も儲からなかつたし、相手の女もなく、おまけに生來何か無邪氣な空想にとらはれる性質であつた。彼のまはりにゐる者と言つたら百姓あがりのよく働く慾のふかい櫻桃と、妻をとられても不思議なほど無神經な烏狗だけである。勤務は不満でたまらなくなると何時も何處かの山上にたてこもつてゐる老馮の事を考へる。

彼の仲間に入れてもらはうか？　だが機會がまだ來なかつた。勤務の心の中には自分でもつかめない實現されぬ空想がちてをり、永い軍隊生活で生産からはなれてゐた彼には烏狗や櫻桃等農民の心はわからなくなつてゐる。

櫻桃は老馮をおそれてゐる。彼は無能力なため彼等から見棄てられたのである。彼は百姓仕事が好きなので其の他の連中には本能的に惡感情を抱いてゐる。これに反して不思議は烏狗は老馮について何か知つてゐるやうであつた。

老李と勤務の間には幾度か衝突が起つた。勤務は老李から離

れようとしたが完全な失業には我慢がならなかつた。櫻桃はますます勤務をなれて老李に尾を振つて満足してゐた。

だが五月の村芝居の時が來た。

募集のかき入れ時である。老李は演壇の上で聲をからして馬鹿供を説得しようとする、だが誰も應募して來ない。趕尖と楊得勝といふ二人の男が兵隊になつただけだ。だが其の日は勤務の言葉で食事には肉の御馳走が出され二人の男は勤務を尊敬し、彼自身も自分が「英雄」になれるやうな氣分が次第に濃くなつてくるのであつた。

不思議な烏狗は實際は利巧な男であるらしかつた。勤務は知らず知らずの間に彼から色々の言葉を聞いてゐた。

のろまの趕尖は別れて來た妻君の事ばかり考へてゐる。彼は夜に乘じて逃亡しようとするが老李は彼を逃さなかつた。趕尖は鞭うたれる。趕尖は「女」のために、兵隊になつた……。此の事が勤務の「英雄」心を動かした。女といふものは絶對的に好いものではないか。翌日、老李の留守に勤務は妻君にあつてすぐ歸るといふ約束で趕尖を逃がしてしまふ。

だが趕尖はもどつて來なかつた。勤務は裏切られたので、あらうか？　趕尖は來ないで女がやつて來た。しかも泣きながら訴へながら。

「英雄」はますます高まらずにはゐられないのだ。趕尖は誰かに捕へられたと云ふではないか。

勤務はいよいよ老李の反對を押しきつて、楊得勝と櫻桃をしたがへ趕尖の家へでかける。彼等が到着した時には趕尖はうん

となくられて放免されてゐた。趕矢は戀仇にやられたのである。勤務は本領を發揮して仇の家にどなり込み火をつけて焼き拂ふぞとおどかしつける。

だが仇の男はゐなくて老婆と、子供がゐるだけである。女子供を「英雄」が相手に出来るであらうか。彼はどなる事もやめてすっかり子供が好きになつてしまつたのであつた。

彼等の仲なほりの酒宴の最中に老李が警官をひきつれて馳けつけて來た。勤務に自行動をとられた老李は怒氣のやり場に困つてゐた彼は趕矢から金を請求する。だが勤務の口入れで仇の男の家から少しばかり金を出して老李と警官にわたして此の小事件のかたはついた。だが勤務の位置は急に上つてゐたのである。

土地の無い村民は飢ゑてさまよひはじめたが不景氣な百姓達は水車踏みにも彼等を傭はうとしなかつた。茫然とした浮浪人は勤務のもち歩く募集の白旗をめぐり集つてくるのであつた。彼等の中にはまだ子供と云つてもよい若者もゐたし、こんな子供なんか片手でしめ殺せるやうな野獸のやうな男もゐた。事實彼等は一寸した事でも人を殺しかねなかつた。

或る油條賣りは一寸罵しられたために少年につかみかかりそして殺してしまつた。彼は森の中を獸のやうにかけまはる。そして幸にも少年が息をふき返したときいて再び應募して兵隊に入つて來る。

今や白塔寺には以前とは一種かはつた空氣がみなぎりはじめたやうである。

庭の中には新米の兵士どもが一杯になり、騒がしく動きまはつてゐる。その中には殺されさうになつた少年もゐれば、殺しそこなつた油條賣りもゐる。

彼等はすでに仲なほりしてゐる。いつまでも喧嘩をしてゐる必要が何處にあらうか？

新米の兵士達は字を知らないのがあたりまへであつた。ところが今度は珍しくも字をしつてゐる男があらはれた。彼は軍隊式に歩いて來て敬禮をし「報告します。私は王國治であります」と老李に答へたのである。其の男は非常な物しりであるらしかつた。それが勤務には不愉快でたまらない。

勤務は此の男を征服しようと考へて射撃の試合を申し込んだが、反對に負けてしまつた。その上二回目にはわざと其の男は自分が負けてしまつた。

何といふ屈辱。しかし次第に勤務は征服しようといふ望みを棄てて王國治に心服して行くのであつた。

彼等二人の、兵士の間における信用はますます高まつて行く。やがて兵士達は老李から三元づつの手當をもらつたが五元づつわたすのが當然であることが一同に明かとなつた。彼等の眼は一樣に冷く老李にむけられてゐる。

星が空一面にまばたいゐる夜、烏狗は決心をしてゐた。老李と自分の妻を焼き殺してやらうか。だが外の連中がかはいさうだ。それより女のもつてゐる金箱を盗み出してそれを持つて老馮の處へ逃げて行く方がよい。

彼は金をぬすみ出し眠つてゐる自分の子供にだけ接吻をして

立去つて行く。

「あいつらはお前<sup>め</sup>えをよく泣かしたな。お父つあんがお前<sup>め</sup>えの仇討をしてやるぞ」

眠られぬ夜を勤務も外に出て過さうとしてゐた。勤務と烏狗は偶然にも會合した。

勤務には自由に逃げて行く烏狗が羨しかつた。

その時一つの影が彼等を捕へた。それは王國治であつた。王國治ははじめて彼が山上の老馮の仲間であること明かにして烏狗に合印の竹札をわたした。

次の朝、老李は自己のおそるべき破滅を知つたのであつた。彼に残された路は只一つ逃げ出す事であつた。

残された兵士達はどうすればよいのか? 「出かければよいのさ」と勤務は答へる。

白塔寺の庭内は蜂の巢をつついた様になる。其の時王國治は彼等をしづめ自分の計畫をうちあげた。

櫻桃と烏狗の妻のみが依然として老李の味方になつてゐた。だが二人はすでに孤立した存在になつてゐる。

烏狗が歸つて來た時、彼の妻は「強盜だ強盜だ!」と罵しつたがその時の烏狗はすでに権力者と變つてゐた。怒りくるふ女は縛りあげられ櫻桃も同じ運命におち入る。今は山に向つて出發するばかりだ。

しかし烏狗には心配なものが一つ残つてゐる。彼の子供である。誰が育てて行くことが出來やう。だが勤務は烏狗を安心させるやうに云ふ。

「その女も一緒に連れて行けばいいぢやないか」

すべての用意はかくして出來上つた。彼等には自分達の入り込んで行く環境が果してどんな物であるか明確ではなかつた。だがただ其の環境の中では彼等がもつと活潑に敏捷に大膽に注意深くなりそして自分達の生命を守つて行くであらうと云ふことは知つてゐたのであつた。

武田泰淳譯

「文藝通信」は、文藝春秋社から刊行された文芸綜合雜誌である。昭和八年十月一日(創刊号)から昭和十二年三月一日(第五卷第三号)まで計四十二号発行され、昭和十二年四月からは、同社の「文學界」に吸収された。

武田泰淳が發表の機会を与えられたのは、第五卷第二号。つまり、「文藝通信」最終号の前号にあたるものである。

「文藝通信」は小特輯が編まれることが多かったが、昭和十二年二月号(第五卷第二号)は、「新興中華文壇の現勢」として、以下の作品が掲載された。

「香港」 魯迅作・小田嶽夫譯

「白旗手」 魏金枝作・作品紹介及び大略 武田泰淳

「魯迅の思ひ出」 一戸務

「傑作ダイジェスト 阿Q正傳 魯迅作」

「最近の中國文學とジャーナリズム」 吉村永吉

「中國作家列傳」 武田泰淳

「中國文壇茶話圖」 魯少飛作・岡崎俊夫譯（中國文學月報より）

これらの特輯のほかに、「新進大衆作家に」（白井喬二）、「ある忠告」（片岡鐵兵）、「大事件とその後始末」（中野重治）、「詩壇の新人」（萩原朔太郎）、「わが推賞する新進詩人」（三好達治）、「詩壇への願ひ」（中原中也）、「横光氏は巴里で何をして来たか」（川上徹太郎）等が同号に掲載されている。

「發行兼印刷兼編輯人」は菊池武憲。実際の編集長は永井龍男が担当したとい<sup>2</sup>う。定価は「十五錢」であつた。

武田泰淳は、この昭和十二年の「文藝通信」二月号に掲載した「中國作家列傳」を含め、何度か中国現代文学や文壇について鳥瞰した文章をものしている。

主なものをあげると以下のとおりである。

・「中國左翼文壇の現状」（「文化集團」昭和九年七月 「狐塚牛太郎」の筆名で執筆<sup>3</sup>）

・「中國文學情報」（「文化集團」昭和九年十月 「狐塚牛太郎」の筆名で執筆<sup>4</sup>）

・「昭和十一年に於ける中國文壇の展望」（「支那」昭和十二年一月）

・「中國作家列傳」（「文藝通信」昭和十二年二月）

・「抗日作家とその作品」（「文藝」昭和十二年九月）

これらの文章が発表されたのは、昭和六年（一九三一）九月十八日、奉天郊外の柳条湖で起きた満州鉄道の爆破事件いわゆる満州事変から、昭和十二年（一九三七）七月七日、北京郊外の永定河にかかる蘆溝橋で日中両軍が衝突した蘆溝橋事件までの時期とはば重なる。

り合う。両事件は、宣戦布告のないまま日中戦争の勃発へと繋がることになるわけだが、その時期に武田が、今の中国の現状と諸問題を描いている中国現代作家とその作品を日本に知らしめようとした意義は大きい。

とりわけ「中國作家列傳」は、文藝春秋社の商業雑誌である文芸誌「文藝通信」に掲載されたものであり、読書界への影響も、また二十五歳の青年・武田泰淳にとつての張り合いも大きかったにちがいない。

さて、武田泰淳が魏金枝（一九〇〇—一九七二）の作品を翻訳したものは、この「白旗手」のほかに二点あることが判明した。

昭和十一年九月に河出書房から刊行された『世界短篇傑作全集』第六卷「支那印度短篇集」（翻譯代表者 佐藤春夫）では、魏金枝の「前哨兵」を翻訳し、その前に魏金枝の略歴と、魏金枝が自作について述べた文章を紹介している。<sup>5</sup>

また、昭和十四年十二月に伊藤書店から刊行された「支那現代文學叢刊」第二輯『蠶』（編輯者 中國文學研究會）に、魏金枝の「我家の出来事」を翻訳し、その前に「魏金枝略傳」を付している。

いずれも、『増補 武田泰淳全集』に未収録であり、武田年譜の定本ともいふべき古林尚氏作製の「武田泰淳年譜」に『増補 武田泰淳全集』の別巻『増補 武田泰淳研究』（昭和五十年三月 筑摩書房）に収録）にもその存在についての記述はない。

ここでは、それぞれ翻訳の前に記した武田の文章のみを掲げておく。<sup>6</sup>



魏金枝略傳

魏金枝は夙に「文學週報」「小説月報」など「文學研究會」系の雑誌に短文を発表してゐたが、一九二六年魯迅等の『莽原』に農村の沈滞した佗しい雰圍氣を描いた『留下鎮上的黄昏』が紹介されてから注目を引く作家となつた。彼は農村及び農民の憂鬱とペーソスを寫して獨特の味ある作風をもつてゐる。而もそれは空想的乃至夢幻的なものではなく、生活の抜きさしならぬ現實からにじみ出る含涙の文章である。彼が普通の堅樸一點張りの農民作家とちがつて、農民の靈魂を描く作家と稱せられる所以である。

茲に紹介した『前哨兵』もその中に收められてゐるところの創作集『白旗手』の序文に、彼は次のやうに言つてゐる。

「此處に集められ、描かれた人間はすべて馬鹿らしい人間である。この點に關して或る種の讀者は不快を覺えるかも知れない。だがそれはどうにも仕方のない事である。といふのは私はこれらの人間が成長した土地に成長したものだからである。若し人が『君はこんな馬鹿らしい人間が好きなのか?』ときけば、私は『無論だ』と答へる。私の父親も馬鹿らしい農民だし、母もそのほか近所の人々もさうなのだ。私は彼等の息子であり、仲間である。それに彼等とても世の人が息子や仲間を愛するやうに、互に愛することを知つてゐる。馬鹿らしいとて何で彼等を愛しないであらうか。……」(武田)

(『世界短篇傑作全集』第六卷「支那印度短篇集」)

魏金枝 Wei Chin-chih 夙に「文學週報」「小説月報」等「文學研究會」系の雑誌に作品を発表してゐた。魯迅等が發行してゐた『莽原』に農村の沈滞した佗しい雰圍氣を描いた『留下鎮上の黄昏』を發表してから一躍有名となつた。長篇『白旗手』は兵士の生活を取りあつた傑作であるが、「奶媽」「制服」等の短篇集に集められた作品は農民の事を題材としてゐる。彼ほど誠實に農民の靈魂にふれた作家は中國にもゐない。パール・バック等の外國の作家より遙かに大地の虜である農民の精神を肉體的に知つてゐる作家と言ふ事が出来る。

(『支那現代文學叢刊』第二輯『蠶』)

武田泰淳は「文藝通信」に作品を發表した八ヵ月後の昭和十二年十月、召集され日中戦争に出征する。武田は自らが紹介した中國の現代作家たちが生き文学活動を営む大陸の地へ兵士として足を踏み入れ、その作品に描かれた中國の農民、労働者、兵士、子ども、女、自然、文化、そして屍とも直に対峙することになるのである。

注

- (1) 『竹内好全集』第十五卷(一九八一年十月 筑摩書房)
- (2) 澁川曉「登竜門だった雑誌」(『文藝通信総目次・執筆者索引』小田切進編 平成四年五月 日本近代文学館)
- (3) 拙稿「武田泰淳と「文化集團」(その一)」(「上田女子短期大学紀要」第二十二号 一九九九年三月)を参照されたい。

- (4) 拙稿「武田泰淳と「文化集團」(その二)」(「上田女子短期大学紀要」第二十五号 二〇〇一年十二月)を参照されたい。
- (5) 本書で武田は、郭沫若の「函谷關」も翻訳している。
- (6) 近日裡に「武田泰淳の翻訳活動」について纏める予定である。